慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	社会運動における「アンビバレント」な声の表出場面 : 運動体の主張や組織・ 活動家文化をめぐる収斂と分離の狭間で
Sub Title	"Ambivalence" articulated within social movements : participants' contradictory feelings about dominant social movement customs
Author	森, 啓之(Mori, Hiroyuki)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2007
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 : 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.65 (2007.) ,p.15- 29
JaLC DOI	
Abstract	Within social movements, the dominant movement customs are established through organizational and tactical movement activities, such as adherents' formal rituals and informal interaction. The common moral and ideology of social movement adherents are also shared through the irinteraction. Some, however, point out that social movement adherents occasionally show "ambivalence" about the social movement normative aspects, such as the shared moral and ideology, and the routine organizational activities. The "ambivalence" means a simultaneous acceptance and rejection of the normative aspects. Through their movement participation, adherents feel satisfaction, happiness and achievement. Simultaneously, they also feel dissatisfaction, self-doubt and disillusionment. In these situations, the contradictory feelings are expressed. In this paper, the main focus will be on situations in which participants, "ambivalence" about social movement normative aspects is expressed. For the purpose of analyzing the situations, social movement researches which focus on the participants' meaning construction of their movement participation are examined. Firstly, the background of social movement researches focusing on the participants, meaning construction is mentioned. And then, situations in which the "ambivalence" is showed are clarified.
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000065-0015

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

社会運動における「アンビバレント」な声の表出場面

——運動体の主張や組織・活動家文化をめぐる収斂と分離の狭間で——

"Ambivalence" Articulated within Social Movements

—Participants' Contradictory Feelings about Dominant Social Movement Customs—

森　　啓　　之*
Hiroyuki Mori

Within social movements, the dominant movement customs are established through organizational and tactical movement activities, such as adherents' formal rituals and informal interaction. The common moral and ideology of social movement adherents are also shared through their interaction.

Some, however, point out that social movement adherents occasionally show "ambivalence" about the social movement normative aspects, such as the shared moral and ideology, and the routine organizational activities. The "ambivalence" means a simultaneous acceptance and rejection of the normative aspects. Through their movement participation, adherents feel satisfaction, happiness and achievement. Simultaneously, they also feel dissatisfaction, self-doubt and disillusionment. In these situations, the contradictory feelings are expressed.

In this paper, the main focus will be on situations in which participants' "ambivalence" about social movement normative aspects is expressed. For the purpose of analyzing the situations, social movement researches which focus on the participants' meaning construction of their movement participation are examined. Firstly, the background of social movement researches focusing on the participants' meaning construction is mentioned. And then, situations in which the "ambivalence" is showed are clarified.

1. はじめに

個々の社会運動をめぐっては，運動体の主要な主張や組織・活動家文化に対して錯綜・両価性を示す「アンビバレント」な声の存在が経験的に指摘されてきた。社会運動の担い手のなかには，運動体の主張や組織・活動家文化に共鳴すると同時に，それらに対して距離感を吐露する者もいるというのである。

社会運動研究において，アンビバレンスという視点の重要性を説くのはグールド (Gould 2001) である。グールドは，レズビアンとゲイの反差別運動 ACT UP (AIDS Coalition To Unleash Power) を事

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科社会学専攻博士課程（教育社会学）

例に，そのポリティクスのダイナミズムを解き明かす。グールドによると，アンビバレンスは，自らの性的志向をめぐる拒絶と受容，それと同時に，異性愛を支配的価値とする社会へ向けられる魅惑と不満の共時的存在を意味する。レズビアンとゲイの人びとは，幼児期における家庭内での社会化を通じて，社会的同化に魅力を感じるようになる。しかしその一方で，彼らは，自らを不平等な状況に置き，逸脱化する社会に対して不満を感じるようになる。社会的同化への魅力は，エイズ併発症によるレズビアン・ゲイの死者増加への社会的無関心，同性愛を違法化し同性愛婚を禁じる社会的制度，差別禁止制度からの同性愛者の排除などにより縮減される。そして，ストーンウォールの反乱以降，自らの性的志向をカミングアウトするプライドが，レズビアンとゲイの間の規範的感情になり，ACT UP も含めた反差別運動の中心に位置する人びとは，政治的場面を含めた相互行為場面において，その規範化を促してきた。そのようなアンビバレンスをめぐる「感情管理」は，ある側面を誇張しそれに背反する側面を抑制する。

アンビバレンス，また，そのアンビバレンスをめぐる感情管理は，エイズ流行へのレズビアン・ゲイによる組織的政治活動を拘束し続けてきた。グールドによると，自らの性的志向を受容し，異性愛を支配的価値とする社会へ不満が向けられれば，社会運動は闘争的なものになる。逆に，性的志向を拒絶し，異性愛を支配的価値とする社会への魅惑が強まれば，社会運動は闘争性を失う。個人の相矛盾する「感情」の一方が強められ，それが運動を方向づける。しかし，個々の運動参加者の中では，そのように相矛盾する「感情」は，どちらも容易に支配的なものにならず，一方に対する背反的感情が絶えず存在し続ける。グールドは，それをアンビバレンスと捉える。

グールドの論考は，政治的機会構造論に位置づいており，アンビバレンスのあり方により，レズビアン・ゲイの社会運動の動員がいかに拘束されるか描写する。具体的には，政治的機会構造論が照準してきた，社会運動を取り巻く「外的」状況の変遷と，ACT UP 内の「内的」状況の変遷の相互関係を時系列的に追う。言い換えれば，社会運動の主張する中心的価値・規範的活動形態の変遷を，その運動を取り巻く外的要因との相互関係で，マクロな視点から描写する。そのため，アンビバレンスという概念提示を行いながらも，それが最も顕在化しうるミクロ場面での表出状況を十分に描写しえていない。本稿では，グールドのアンビバレンス概念を継承しつつ，運動参加者のミクロな意味構築を掘り下げる。

具体的には，社会運動諸場面をめぐる参加者の意味構築に焦点化する社会運動研究を振り返りながら，アンビバレンスの表出場面を整理する。フレーミング研究など，社会運動参加者の認知的側面に照準するミクロ動員論では，運動体の主要な主張や組織・活動家文化に対して錯綜・両価性を示す声について，何人かの論者が例を挙げて説明している。しかし，それらの議論が互いに無関係に展開しているため，そのような声の表出に関する概括的把握が進んでいるとはいい難い。したがって本稿は，それらの論考を振り返りながらアンビバレンス表出の整理を行い，その視座の社会運動研究における可能性を検討したい[1]。まず，次章において，アンビバレンス表出を分析する際の分析レベルを整理し，アンビバレンス表出図式を示す。次に第 3 章で，その図式を踏まえた具体的表出をみたい。

2. アンビバレンス表出図式の提示

(1) ミクロ動員論におけるフレーミング研究の位置

本稿冒頭でみたように，グールドは，アンビバレンスを，個々の運動参加者における，ある「感情」とそれに相反する「感情」の共時的存在として説明する。グールドは，そのミクロ表出場面を十分に説

明していないが，それは，いかに整理可能なのであろうか。本稿では，そのための概括的図式を示した上で，その表出場面を説明するが，そのために，その分析レベルを明確にする必要がある。社会運動研究の議論は広範にわたるため，その議論のいずれを参照し，分析レベルの統一を図るべきなのであろうか。

本稿は，その分析レベルとして，社会運動諸場面をめぐる運動参加者の意味構築に焦点化するフレーミング研究を採用するが，本章では，アンビバレンス表出の図式化の前段階として以下の作業を行う。第1に，フレーミング研究の成立背景を概観しながら同研究の特長である分析水準をみて，それを採用する理由を述べる。第2に，そのフレーミング研究に位置づき，社会運動体への参加者による収斂状況 (Association) と分離状況 (Disassociation) に関する議論を振り返り，運動参加者の両価性・錯綜の表出に関する視点を整理する。第3に，社会運動研究で議論されてきた良心的構成員概念を振り返り，アンビバレンス表出を掘り下げる上で，社会運動参加者間の立場性の違いの視点を導入する重要性を述べる。そして本章最後で，3つの作業を踏まえた図式を示し，第3章以降で行うアンビバレンス表出場面説明の指標とする。

まず第1の作業である。結論から先にいえば，本稿がフレーミング研究の分析枠組みを採用する理由は，それを通じて，社会運動内の相互行為過程をめぐる，言語的資源を媒介とした参加者の意味構築側面が，より鮮明に描写可能になるからである。以下，そのアプローチの成立背景や特長を概観する。

1980年頃から社会運動研究で一番発展著しかった分野は，潜在的/顕在的運動参加者の運動参加に焦点化するミクロ動員論であった。その背景には，1970年代にアメリカで起こった資源動員論の存在がある。それまでの古典的集合行動論では，人びとの運動参加に関して，個々人が持つ不満が社会運動参加の直接的源であるという，人びとの非合理性を中心に据えた議論がなされていた。資源動員論は，そのような不満を直接的源とする説明を批判し，運動体が持つ草の根組織といった社会的・組織的ネットワークやそのネットワークに所属する人びと勧誘力などを，運動形成の源となる「資源」と捉えた。要するに，社会運動が示す価値のみではなく，運動体の組織的活動に議論の重点を置いたのである。1980年頃になると資源動員論への批判が寄せられ，また同じ頃にヨーロッパで起こった「新しい社会運動」論の影響もあり，資源動員論は，それまでと異なる理論的発展を遂げる。そして1990年代半ばに，フレーミング研究や政治的機会構造論，動員構造論といった分析射程に枝分かれが起きた。

なかでもフレーミング研究は，古典的集合行動論と資源動員論を部分的に導入しながら発展する。古典的集合行動論が説明の中心に置いた人びとの不満の構築プロセスを，資源動員論が示す運動体ネットワークという視点を導入しつつ，主に運動参加者の言語的資源を媒介として掘り下げてきたのがフレーミング研究の特長である[2)]。フレーミング研究のエッセンスは「個人的関心，価値観および信念と，社会運動組織の活動，目的およびイデオロギーとのセットを一致させ，相補的にするような，個人と社会運動組織の解釈志向の結合」(Snow *et al.* 1986: 464) への焦点化という点に表れる。例えば「フレーム調整」は，運動支持者獲得のために，主に社会運動側からなされる。そして，他の運動体によるフレーミングとの競合を見越して，その一貫性と可変性の両立が図られる。そこには，社会運動と潜在的・顕在的運動参加者の「解釈志向」の一致，または不一致への関心が存在する。

再度，フレーミング研究の特長を確認すると，1点目は，ある程度の不調和を見込みながらも集合性構築の基となる相互行為コミュニケーション過程への照準であり，2点目は，主に言語的資源を媒介とした文化的資源への照準である。その視座を通じて，社会運動諸場面をめぐる，運動参加者の意味構築を明確に焦点化しようというのである。

(2) 社会運動体への収斂・分離/運動体の示す価値・運動体組織的活動という視点

グールドによるとアンビバレンスとは，ある「感情」とそれに相反する「感情」の共時的存在である。社会運動の相互行為場面における，その表出はいかに捉えられるのであろうか。ここでは，ハントやベンフォード，スノウらの研究 (Hunt and Benford 1994 他) を参考に考えたい。ハントとベンフォード (Hunt and Benford 1994) では，社会運動参加者による「アイデンティティ・トーク」(Identity Talk) ——ミクロ動員を水路づけうる言語的資源——に着目する。それを通じて，運動体が示す中心的価値や運動体組織的活動をめぐる参加者の意味構築を掘り下げる。そこには，運動内で参加者が用いる言語的資源としていくつかのレトリックが抽出される。順にみると，1 つ目の「自覚 (“awareness”)」は不正義の意識化，2 つ目の「活動的 (“active”)」は最初の勧誘と運動参加，3 つ目の「献身 (“commitment”)」は運動参加の深化や運動体への同一化強化，4 つ目の「うんざり (“weary”)」は運動体への共鳴しきれなさの示唆（これは運動体からの完全な離反や退出ではない）である。

ハントらの議論の特長は，4 つ目の「うんざりする (“weary”)」といった要素を導入する点である。ハントらによると，最初の 3 レトリックを用いた意味構築を通じ，社会運動体への共鳴や関与深化といった収斂状況が示され，最後の 1 つを用いた意味構築を経て，社会運動体が示す価値や日常的組織活動における共鳴しきれなさという分離状況が示される。そしてハントらは，その 4 レトリックは場面に応じて混交して顕在化すると指摘する。他のミクロ動員論が，しばしば運動参加者の意味構築過程を 1 つ目から 4 つ目へと直線的に捉えるのに対し，ハントらは，そのように見なさない。その点に彼らの議論の特長がある。ハントらの議論を踏まえ再確認すると，収斂状況は，言語的資源を媒介とした社会運動諸場面をめぐる共鳴・関与深化という参加者の意味構築であり，分離状況は，社会運動諸場面をめぐる共鳴・関与の困難示唆と整理できる。

また，この収斂/分離状況を整理する上で，それが，イデオロギーなど運動体が示す価値をめぐってのものなのか，それとも，それとは別次元の運動体組織的活動をめぐるものなのかについても整理する必要がある。ハントらは，その点について明確に議論していないが，ジャスパー (Jasper 1997: 85-87) によれば，潜在的/顕在的社会運動参加者は，運動体の示す価値といった個別的イシュー——ジャスパーはそれを「運動アイデンティティ」と区分する——のみならず，運動体の慣習的組織活動——ジャスパーはそれを「組織アイデンティティ」「活動家アイデンティティ」などと区分する——をめぐっても収斂/分離が示されるという。

前節でも触れたが，この組織的活動への関心は，人びとの不満を説明の機軸に据える古典的集合行動論への批判として登場した，資源動員論が保持するものである。その登場の背景にある公民権運動などをみても，直接的利害を得る人びとが相対的に少ないもかかわらず，なぜ運動が運動として発生・拡大するのか。それを掘り下げる際に，社会運動体が示す価値といった要素以外に，社会運動内外の資金や人的・組織的ネットワークの有効活用などの組織的活動を，社会運動の「資源」として概念化し分析対象とする必要があった。ジャスパーの視点は，その視点を，参加者の意味構築という分析射程に広げたものといえる。

社会運動参加者によるアンビバレンス表出場面をみる前段階の作業として，フレーミング研究の特長を振り返り，収斂/分離概念の説明，また運動体が示す価値以外の組織的活動への着眼の重要性をみてきた。本稿は，以上の議論が保持する分析レベルに立脚し，次章以降のアンビバレンスの表出場面を整理する。しかし，アンビバレンス表出には，社会運動参加者間の立場性の違いという要因も関連する可

能性もあるため，次節で，社会運動研究で議論されてきた良心的構成員概念を振り返りたい。

(3) ミクロ動員論における良心的構成員概念

社会運動は多様であり，反人種差別運動や女性解放運動のように，しばしばアイデンティティ・ポリティクスと呼ばれる被差別者・被抑圧者運動もあれば，反核運動や環境保護運動，また動物愛護運動のように，より広い意味で社会変革を希求する運動が存在する。

ジャスパー (Jasper 1997) は，この点について以下のように説明する。前者の社会運動は，「人種」「性別」などの集団的特性・境界・集団的利益の相違への認識に基づき，それぞれにカテゴリー化された各グループ間のアイデンティティを旗頭に展開する。そして，そのような集団的特性を持つ人びとのために，平等・社会的同化・個々の集団的利益が追及される。ジャスパーは，このような社会運動を，反人差別運動などを例に挙げて，「旧来の公民権運動 (Citizenship movements)」と位置づける。その一方で，反核運動や環境保護運動といった後者のタイプの社会運動は，人種，性別といった集団的特性に応じたアイデンティティを直接的に旗頭にする必要はない。彼らは，人間性，環境汚染や平和創造をめぐる将来世代への責任，自然性，反経済至上主義といった旗頭を掲げる。ジャスパーは，これらの社会運動を「ポスト公民権運動 (Post-citizenship movements)」と位置づける。以下，本稿でもジャスパーの区分に従い，「旧来の公民権運動」と「ポスト公民権運動」とのみ表記する。

社会運動体の目標到達を通じた，また運動参加を通じた，参加者の直接的利益は，「旧来の公民権運動」では，日常生活における差別や法的・制度的不平等の是正であり，それが運動参加の誘因となる。一方，「ポスト公民権運動」の場合は，反経済至上主義といった日常的ライフスタイルの選好をめぐり直接的利益が認識される。このように，両タイプの社会運動に，運動目標達成を通じた何らかの利益獲得が見出せる。両者の相違点は，後者のタイプの社会運動のほうが前者のタイプと比べて，より広く人びとによって共有可能な価値の提示を行っている点である。その意味で，運動目標の内容的差異が存在する。しかし，その差異の存在は，運動目標達成による直接的利益有無と動員誘因に限定的に焦点化する社会運動研究とって大きな問題とならない。社会運動研究にとって重要なテーマとなるのは，潜在的/顕在的運動参加者に，運動目標達成による受益が存在するか否かのみで，その内容的差異は問わないのである。

しかし両タイプの社会運動とも，その目標達成による直接的利益を享受しない，しばしば支援者と呼ばれる参加者層が想定される。この点は社会運動研究では，良心的支持者概念，良心的構成員概念として議論されてきた。良心的支持者，良心的構成員の議論は，資源動員論がその契機となり登場した。その視点は，社会運動やその運動をめぐるイシューに傍観者性・部外者性を持つ人びとの支持を，運動体はどのように獲得するのかという点である。マッカーシーとゾールド (MaCarthy and Zald 1977) によると，良心的支持者とは，当該の社会運動体による目標到達を通じて，自らの権利獲得拡大といった直接的利益が存在しないにもかかわらず支持を表明する人びとを指す。良心的構成員とは，当該の社会運動体による目標到達を通じて直接的利益が存在しないにもかかわらず支持表明し，なおかつ積極的に運動体の活動に参加する人びとを指す。良心的支持者と良心的構成員の相違は，運動体に参加し活動する頻度の違いによって説明可能になり，後者の良心的構成員のほうが，より深くコミットメントする。したがって，社会運動体内の相互行為場面に照準する本稿において重要な視点を提供するのは，この良心的構成員概念である。

マッカーシーとゾールドの議論の念頭には，公民権運動に関与する白人の存在が挙げられる。要するに，公民権運動の白人参加者のように，当該の社会運動参加者の一部にとっては，不平等是正といった運動目標達成による利益獲得は見込めない。それにもかかわらず，なぜ彼らは運動参加するのかという問題意識が良心的支持者・良心的構成員の議論へとつながる。

マッカーシーとゾールドは，「旧来の公民権運動」を念頭に置きつつ，良心的支持者・良心的構成員の議論を展開してきたが，その参加者層は，「ポスト公民権運動」の一部においても見出しうる。例えば日本における豊島のゴミ問題など，産業廃棄物処理場の一部過疎地への集中がみられるが，その問題をめぐる環境保護運動参加者は当該地域住民のみではない。そこに直接的被害を受けるリスクもなく，運動目標達成による受益のない都市部住民も，支援者として運動参加する。これと同じことは，原子力発電所の核廃棄物処理場建設反対運動や新潟の諫早湾干拓事業反対運動など，多くの社会運動に見出される。そのような種類のイシューをめぐる運動体の場合，良心的支持者・良心的構成員の存在が明確に想定しうる。

しかし当然のことながら，「ポスト公民権運動」の全てに良心的支持者・良心的構成員を想定することは不可能である。例えば動物愛護運動において，そのような運動目標達成をめぐる受益・非受益関係を見出しうるかといえば，それは現実的に想定し難い。さらに確認すべき点は，運動目標が，仮に，全人類の平和，広い意味での人間開放，反抑圧の闘争を通じた新世界創造，全地球的環境問題の改善，その他など，極限まで抽象化されることが起きれば，その目標達成を通じた利益獲得は普遍的にすべての人びとにあてはまる。そのような普遍的目標を掲げる運動体においても，良心的支持者・良心的構成員の存在を想定することは，その概念の定義上困難である。

したがって良心的支持者概念，良心的構成員概念が意義を持つのは，運動体が，その置かれた個別的文脈を背景に具体的利益・権利獲得を目指すような場合に限られる。実証研究に重きを置く社会運動論が分析対象とするのも，多くは，そのような具体的目標を掲げる運動体である。本稿も，第 3 章以降，具体的利益や権利を目標に掲げる運動体を念頭に置きながら議論を進める。

マッカーシーとゾールドも指摘する通り，運動体への関与が強い良心的構成員の存在は，運動体発展への重要な資源となるが，それは同時に，運動参加者間の立場性の違いを起因としたコンフリクトを表出させる契機ともなる。また，そのコンフリクトをめぐるアンビバレンス表出も想定しうる。したがって，本稿では，運動目標達成を通じた受益参加者によるアンビバレンス表出のみならず，良心的構成員によるアンビバレンス表出も合わせた 2 つの図式化を行う。

(4) アンビバレンス表出の図式化とその図式の見方

次章のアンビバレンス表出場面説明の前段階として，本章では 3 つの作業を行ってきた。第 1 にフレーミング研究を参照しながら分析レベルの統一化を図り，第 2 に社会運動体に向けて参加者により示される収斂/分離の両状況などを整理し，第 3 に社会運動研究で論じられてきた良心的構成員概念を振り返り，社会運動内の参加者間の立場性の相違を背景とした図式化の重要性を述べた。それらの点を踏まえ，以下の図式化を行った。

図式A
運動目標達成を通じた受益参加者

	収斂/分離	
運動体の示す価値	①	③
運動体の組織活動	②	④

図式B
良心的構成員

	収斂/分離	
運動体の示す価値	⑤	⑦
運動体の組織活動	⑥	⑧

この図式の見方は，以下になる。横軸に，運動参加者が示す「収斂」と「分離」をとり，縦軸にはその収斂と分離が向けられる要素として「運動体の示す価値」と「運動体の組織活動」をとる。

グールドの示すアンビバレンスとは，社会運動をめぐる個々の参加者の持つ，ある「感情」とそれに相反する「感情」の共時的存在であり，言い換えれば，それは運動体へ向けられる運動参加者の両価性・錯綜の表出である。本稿冒頭でみたグールドの示すゲイ・レズビアン当事者の内面的葛藤を例に，この図式の見方を説明すると，それは図式Aの①と③の共時的存在である。運動体から，同性愛の肯定というかたちで示される「価値」をめぐり，それを支持し運動体へ深く関与する面が存在する（この状況は①)。その一方で，異性愛を支配的価値とする社会的同化への魅惑により，運動体の示す「価値」への共鳴しきれなさという一面も存在する（この状況は③)。このように相反する面が，運動参加者の声を通じ共時的に存在する状況。言い換えると，そのように相矛盾する両面を行き来きし続けながら意味構築がなされる状況と説明できる。本稿では，それを「①⇔③」と示す。

もちろん，グールドの議論からも明らかなように，社会運動の主張には，時系列的変遷による可変性，また運動内における中心的主張と参加者の間のリフレクシビリティが存在する。しかし本稿では，操作的に，運動体の中心的価値・規範的活動形態を，ある程度固定的なものと想定し議論を進める。あえてそうすることを通じて，運動体の中心的価値・規範的活動形態に対して運動参加者が示す錯綜・両価性のミクロ表出場面の描写が容易になるためである。

他のアンビバレンス表出も含めた全体像を示すと図式Aと図式Bになり，運動目標達成を通じた受益参加者と良心的構成員の2タイプの図式化を行った。次章以降，順に説明するが，説明順は次章第1節で，図式Aから「①⇔③」,「②⇔③」,「①⇔④」,「②⇔④」と説明し，同第2節から，図式Bの「⑤⇔⑦」,「⑥⇔⑦」,「⑤⇔⑧」,「⑥⇔⑧」とみていく。図式をみる上での補足であるが，当然のことながら，①②③④，また⑤⑥⑦⑧という区分は相対的なものである。それらの明確な区分は容易ではなく，ここでの整理はあくまでも操作的なものである。したがって，個々の類型に関しては仮説的説明も含まれる。また実際の表出場面は，より複雑にからみ合っていることはいうまでもなく，さらなる精緻化を図るのなら，縦軸・横軸とも他要素を導入可能であろう。この図式化の目的は，社会運動の示す価値や運動体の組織的活動へ向けて，参加者により示されるアンビバレンスの概括的整理にある。そのため，その詳細を網羅するのではなく，あえて基本的なあり方を示した。他には，例えば①⇔③④，②⇔③④，①②⇔③，①②⇔④，その他の組み合わせも想定しうるし，それは図式Bにおいても同様である。なお，①/②や⑤/⑥の関係はいずれも収斂のみを示し，③/④と⑦/⑧の関係はいずれも分離のみを示す。そこには，本稿の関心であるアンビバレンスが表出しないため取り上げない。

この図式をみる上で注意すべき点は，しばしば社会運動研究で論じられる「自己変革」（石川 1988）過程とアンビバレンスとの違いである。社会運動への支持・参加をめぐって個人が直面する「自己変革」

過程をめぐる議論では，①②から③④へ，または③④から①②へというかたちで，その過程に運動参加者の葛藤が見込まれながらも，ある程度直線的な，運動参加者の変容が想定される。しかし，①②と③④の間に起こるのは，そのような「自己変革」のみではない。例えば，一端は「自己変革」したと思ったにもかかわらず，その後も継続的に①と③，②と④の間を揺れ続けるようなあり方が想定される。それは⑤⑥⑦⑧の関係についても同様である。その意味で，個々の運動参加者は揺れ続けながら運動参加する存在として想定される。そのような意味で，錯綜性・両価性という用語を用いてきた。次章以降，仮説も交えながら，そのあり方をみたい[3)]。

3. アンビバレンス表出の具体的説明

(1) 受益参加者によるアンビバレンス表出の 4 類型

本章から，前章第 4 節で示した図式を基にアンビバレンス表出の具体的場面をみていく。既に述べた通り，まず図式 A，その中でも①⇔③からみたい。このあり方については，本稿冒頭で紹介したグールドが示しており，なおかつ図式 A との関係は，前章第 4 節で説明したので，ここでは詳述しない。

アンビバレンスという語こそ用いないが，グールドと同じ視点に立ち，高橋 (1994) は，女性解放運動や同性愛者解放運動の運動参加者の声を取り上げる。高橋によると，その運動参加者は，関連するイシューをめぐる運動体の主張に共鳴する一方で，それへの共鳴しきれなさにも直面する。そして運動体の主張や，自らのセクシュアリティをめぐる「通常は必ずしも認識されていない自己内部の亀裂・矛盾」(ibid.: 361) を抱え続ける。それは「矛盾を抱えた〈わたし〉をまるごと受け入れていくのだ」(ibid.: 359) という運動参加者の声として表れる。そのような意味で，自己は「一枚岩的な存在」(ibid.: 359) ではない。高橋によるこの指摘は，グールドのものとほぼ同じである。高橋の視座を延長すると，自らの性的志向の受容が起こり異性愛を支配的価値とする社会へ不満が向けられれば運動が闘争的なものになり，逆に，自らの性的志向の拒絶が起こり異性愛を支配的価値とする社会への魅惑が増加すれば運動は闘争性を失う。

「ポスト公民権運動」の運動体の場合も，①⇔③はみられる。ハントら (Hunt *et al.* 1995) は，反核反戦運動を事例に，運動体の主張変遷をめぐる参加者の葛藤をとりあげる。たとえば，ある運動参加者は，戦争状況をめぐる政府の封鎖政策に関する運動体の主張変遷について「自分は，すごく驚いている。国際法上は，その封鎖は戦争行為に値する。それなのに自分たちは，それを支持している。信じられない，全く信じられないよ。これじゃまるで，自分たちは “Nebraskans for Peace” ではなく，“Nebraskans for a Little War” だね」(ibid.: 203) と吐露する。この参加者は，自ら参加する運動の名称を以上のように皮肉りながらも積極的運動参加を続ける。ハントらは，このような運動体による主張変遷に部分的な共鳴しきれなさを示すにもかかわらず，その運動体から離脱しない層に焦点化する。

次に②⇔③をみる。この状況は頻繁には顕在化し難い特殊な場合に限られる。②⇔③とはやや異なるが，しいて言えば，運動体の組織的活動について関心が示され，運動体が示す価値には関心が示されないという場合なら顕在化しやすい。それは，日常的な運動体の組織的活動へのポジティブな言及が特に反映する運動参加者の声といえる。その声は，運動体に必ずしも関連しない興味・関心を包含させて運動目標・活動を付加的に広げる「フレーム拡張」(Snow *et al.* 1986: 472) においてみられる。スノウが事例として挙げる日蓮正宗参加者には「メンバーが愉快でやさしかった」(ibid.: 473) といった組織的活動への愛着を参加誘因とする声がみられる。またマッカーシーとゾールド (MaCarthy and Zald 1977)

は，職業的社会運動組織のハンガー・コミッションが，自らの交渉を有利に進めるためのシンボルとして，貧しい人びとを運動に駆り出した例を紹介する。このような職業的社会運動組織は，その運動発展のための実質的基盤を，後援者などの外部資源に頼る。そのため，関連するイシューをめぐる受益参加者も，運動戦略上の単なるシンボルとして利用されるのみの場合がある。この場合，利用される側の参加者は，運動体が示す価値に関心を持たず，また詳しく知らされない場合が多い。この状況も運動体の示す価値に関心が示されない例であり，②⇔③になり難い。

ただし参加対象となる運動体の選択肢欠如という環境下では，②⇔③も起こりうる。一部の運動インダストリーには，同イシューでありながら，主張の詳細を異にする運動体が，共時的に複数派生する場合が存在する。この点について，コリンズ (Collins 2001) は，イシューを同じくする複数の運動体の競合が，それぞれの違いを際立たせ，それぞれの組織的展開や拡大の背景となると指摘する。この場合は，潜在的/顕在的運動参加者にとって参加対象となる運動体の選択肢が複数ある状況といえる。しかし，必ずしもそうならず，参加対象の選択肢が1つしかない状況も皆無ではない。例えば，過疎地域住民主体の環境保護運動などは，参加対象となる人びとの絶対数が少ないため，同時に複数の運動体が派生し難い。このような，参加対象となる運動体選択肢の欠如という状況下では，次のように②⇔③が起こりうる。

まず「旧来の公民権運動」の場合について考える。その志向性には，マジョリティと同じ権利の獲得するために既成の社会制度変革を求める運動体もあれば，より根底的に文化的価値変革を迫る運動体も存在する。いずれの場合も，そのタイプの運動体に参加者が求めるものは，運動目標到達による受益のみではない。彼らの日常的被差別経験の苦しみを緩和するため，似た境遇の他成員との親密さを求め，運動体コミュニティに自分の居場所を見出そうとする可能性がある。その場合，運動体の示す価値に共鳴しきれなさを抱えるにもかかわらず運動参加を続けるかもしれない。

また「ポスト公民権運動」の場合はどうであろうか。このタイプの運動体の場合，運動目標達成による受益参加者自身が日常的に被差別経験を持たず，その苦しみの緩和の必要はない。そのため上述した参加誘因は存在しない。しかし，例えば，先に運動参加していた知人との付き合いで，また近所付き合いといった地域コミュニティ内の関係性維持のために，運動目標に共鳴しないにもかかわらず参加する，といった場合なら想定し得る。特に資源動員論登場以降の社会運動研究において，このような社会運動外のコミュニティとの関係に照準する論考は多い。樋口 (1999) は，既存のキリスト教教会コミュニティを利用しながら運動拡大を図る事例を紹介する。その場合，運動外においても求心力のある人物に依頼され，運動参加する人びとの存在が指摘される。これは「旧来の公民権運動」でも同じように起こりうる。以上，多くの仮説を含みながら②⇔③を説明してきたが，上述した場合であれば②⇔③も起こりえなくはない。

次に①⇔④である。これは運動体の示す価値に収斂が示され，その組織的活動に分離が示される状況である。反核運動を事例にするハントとベンフォード (Hunt and Benford 1994) は，「私は，自分たちがやっていることは重要だと今でも信じている」(ibid.: 509) と自ら参加する運動体の目標に共鳴しながら，「何回ものミーティングや自己犠牲，でも全然進展しないし。……疲れきるまで磨り減らされた」(ibid.・省略筆者）と，日常の組織的活動に共鳴しきれなさを示す運動参加者の声を紹介する。またベンフォード (Benford 1993b) も，テキサスにおける反核反戦運動を例に，同じ状況に置かれた参加者の存在を指摘する。

ハントやベンフォードは，これらの声を次のように説明する。このような運動参加者は，それぞれが参加する運動体の目標の重要性を示唆しながらも，日常的組織活動から派生する疲労に言及する。それは，運動体の集合的アイデンティティから距離を置けず過労に苛まれる状況である。ベンフォード (Benford 1993b) は，この過労の示唆にもかかわらず，彼らは，なぜ継続的に社会運動に参加するのかを問う。そして，彼らの声には共通して「道徳的義務」「正義の意識」(ibid.: 206) を示す語彙が含まれるという。以上は「ポスト公民権運動」の例であったが，「旧来の公民権運動」における同様の状況についても，ケリーとブレインリンガー (Kelly and Breinlinger 1996) が，女性解放運動を事例に説明する。

本節の最後に②⇔④をみる。これは運動体の組織的活動をめぐる収斂と分離，その両方の表出である。この状況は，当初は期待していたにもかかわらず顕在化しつつある，他運動参加者の非協力的態度を契機とする場合に顕在化する。例えばハントとベンフォード (Hunt and Benford 1994) は，最初は期待していた他運動参加者による協力姿勢について「ここにそんなものがなかったと，今頃，気がついたよ」(ibid.: 509) と，組織的活動への期待（共鳴する面）と幻滅（共鳴しきれなさ）が交差し続ける反核運動参加者の声を紹介する。ハントらによると，これらの声には，外からみた運動体と内情としての運動体のコントラストが存在する。そして運動体に関する「現実暴露的」(ibid.: 509) 言及が含まれる[4]。

なお，以上みてきた①⇔④と②⇔④の場合，④の組織的活動を契機とする共鳴しきれなさの表出が関連するため，ある程度共通した組織体や活動形態——市民的不服従，座り込み，ストライキ，デモ行進など——を持つ運動体であれば，「旧来の公民権運動」や「ポスト公民権運動」など，いかなるタイプの運動体であろうと共通したかたちで表れる。

ここまでみた①⇔④と②⇔④について，ハントやベンフォードは，次のように特徴づける。運動参加者自身は，勝つ見込みのなさそうな賭けに挑戦するヒーローやヒロインに見立てられる。そして彼らは，最終的に，無理を強いられる状況から疲労困憊に陥る。それぞれの置かれた状況について，「フラストレーション」「無理をする」「無気力」などの共鳴しきれなさを示す語彙とともに語られる。しかし，それにもかかわらず，彼らは，運動体から完全に離れようとか，その状況を見捨てようとしない。ハントとベンフォードは，そのようなレトリックを「バーンアウト・ストーリー」(Hunt and Benford 1994: 509) とまとめる。この状況については，ケリーとブレインリンガー (Kelly and Breinlinger 1996) も，ハントやベンフォードと同じ視点から説明する。

(2) 良心的構成員によるアンビバレンス表出の 4 類型

本節で，良心的構成員によるアンビバレンス表出（図式 B）をみる。なお，良心的構成員に関する議論は，社会運動論における理論研究・実証研究とも，限られた展開しか起きていない。前節でも仮説が含まれていたが，それと比べて，本節では，さらに多くの仮説に基づいた類型化になる。

まず⑤⇔⑦である。本章前節でみた運動目標達成を通じた受益参加者と本節でみる良心的構成員，そのアンビバレンス表出において最も違う点は，⑤⇔⑦であろう（受益参加者の場合なら①⇔③に該当する）。その背景には，運動目標到達による受益の有無が存在する。

「旧来の公民権運動」の場合をみる。被差別者の権利獲得運動であれば，その被差別者のために，運動目標達成を通じて自ら得る利益がなくても参加する者の場合である。そのアンビバレンス表出に，最も影を落とすのは，抑圧者⇔被抑圧者性をめぐる葛藤である。伊藤 (2006) は，アイヌ民族権利運動の参加者を事例に，その点を説明する。参加動機として「人のため」（伊藤 2006）が最も頻繁にみられるが，

そこに良心的構成員として運動参加する困難が存在する。歴史的に搾取する側にある非アイヌ民族と，搾取される側にあるアイヌ民族の間には，抑圧者⇔被抑圧者関係が存在する。そのため，その権利運動に非アイヌ民族として参加する人びと――運動目標達成による受益のない良心的構成員――は，社会的構図のなかで，支援者であると同時に抑圧者にもなりうる。それが，被抑圧者の権利獲得を掲げる運動目標に共鳴しようとしながらも，同時に，自らの抑圧者性・加害者性と直面する葛藤を生み出す。伊藤によると，これは運動参加当初のみならず，それがある程度続いた場合も，参加者から示唆されるという。

伊藤も指摘するように，良心的構成員の性格を持つ支援者の場合，運動目標に共鳴しようと運動に深く関与すればするほど，自らの抑圧者性・加害者性に直面せざるをえないディレンマが起こる。そのような運動目標への根源的な共鳴しきれなさを契機とした葛藤が，アンビバレンス表出へと至る可能性がある。前節の①⇔③では，受益参加者が，運動体の示す価値――例えば同性愛の肯定性――に共鳴しながらも，その価値への共鳴しきれなさ――社会の支配的価値である異性愛規範への魅惑――の間を行き来するアンビバレンス表出であった。しかし，ここでみる支援者性と抑圧者性の同居によるアンビバレンス表出は，それと異なる姿となる。その⑤⇔⑦の関係性は，運動体の示す価値――例えば抑圧されてきたアイヌ民族の権利獲得――に支援者として共鳴しながらも，その非アイヌ民族としての支援者性が運動目標への根源的な共鳴しきれなさ――社会的構図におけるアイヌ民族への抑圧者性――の間を行き来するアンビバレンス表出である。

これは，アイヌ被差別問題などのように歴史的背景を伴う抑圧者⇔非抑圧者関係，差別⇔被差別関係のみならず，例えばアメリカにおける黒人やヒスパニックをめぐる人種差別などの問題でも同様の現象が派生しうる。階層構造としてみれば，白人に多くみられる高階層の安定は，そもそも黒人やヒスパニックにみられる低階層の存在により支えられている。そこにも，アイヌ被差別問題とはかたちを変えた抑圧者⇔非抑圧者関係がある。

また，それとは別のアンビバレンス表出も考えられうる。本郷 (2003) は，反差別運動など社会的マイノリティをめぐる社会運動に良心的構成員として参加する者について言及する。そして，例えば「当事者から『してほしいことなんかない』，『私の気持ちがわかるわけがない』などといわれかねない状況」や「どんなに心を尽くしても当事者の立場や心性に寄り添いきれない」(ibid.: 76) というボランティア参加者の意味構築を掘り下げる重要性を説く。前節でみた①⇔③との関係でみれば，①⇔③において受益構成員は自らの考えに基づいて，運動体が示す価値への共鳴や共鳴しきれなさを直接示すことも可能であった。しかし，⑤⇔⑦の良心的構成員は，自らは被差別者性を持たないため，まず被差別者の受益参加者の意見ありきという姿勢を保つ必要がある。その際に，自らの考えとのズレをめぐり，共鳴する面と共鳴し難い面の共時的存在に直面する可能性もある。そのようなアンビバレンス表出も考えられうる。

「ポスト公民権運動」の場合はどうであろうか。安立 (1987, 1990) は，山林開拓を経た大規模団地造成地の近辺に住む人びとを例に，彼らの運動参加をめぐる意味構築を取り上げる。その人びとは，自らも山林開拓後の新興住宅地に住んでおり，当該地域地元住民を通じて派生した環境保護運動への参加をめぐり「自分たちも，林を切りくずして住んでいるくせに」(安立 1990: 107) といった想いに駆られると指摘する。

この点は，環境社会学で議論される受益圏・受苦圏の問題として考えられる。前章でも述べたが，日

本における豊島の産業廃棄物処理場の反対運動や新潟諫早湾干拓事業の反対運動，また各地で起きる原子力発電所の核廃棄物処理場建設の反対運動などを例に考えたい。これらの運動は，廃棄物処理の危険性，開発を通じた環境破壊によりもたらされる当該地域住民の生活破壊を契機に発生し，一部過疎地に環境破壊によるリスクを集中させる。その一方，そのようなリスクによる直接的被害を受ける可能性の低い都市部住民の便利な生活は，その一部過疎地への負担により支えられている。この場合，一部過疎地住民が受苦圏に位置づき，その受苦に支えら生活を送る都市生活者が受益圏に位置づく。

この状況下の⑤⇔⑦は，受益圏住民が支援者として運動参加する際に，次のように表出する。運動体の示す価値——例えば環境破壊の被害者である地元住民の救済や環境保護——に支援者として共鳴すればするほど，その一方で自らは，その過疎地へ押し付けられた環境破壊の根源となる都市生活者として，運動目標への共鳴しきれなさ——普段は受益圏に生活するという根源的加害者性が付きまとう——の間を行き来するアンビバレンス表出である。これは，伊藤や本郷らが指摘する反差別運動と異なるかたちで表出する加害者⇔被害者関係がある。

以上の⑤⇔⑦を踏まえると，良心的構成員とされる人びとの運動参加へめぐる特有の困難がみえ，その困難から派生するアンビバレンス表出が想定される。この関係は，反差別運動や環境保護運動に限らず，その他のイシューをめぐる運動体にも見出しうる。この後に順にみる⑥⇔⑦，⑤⇔⑧，⑥⇔⑧も，この点と関連してアンビバレンスが表出する。

次に⑥⇔⑦をみる。これは前節との関係では②⇔③にあたる。これは，運動体の価値へ分離を示し，その組織的活動への収斂を示すものである。前節の②⇔③の説明でも述べたが，この⑥⇔⑦は顕在化し難い。⑥⇔⑦と異なるが，その②⇔③の説明でも述べた，運動体の組織的活動に関心を示し，運動体の示す価値に無関心といった場合は想定し得る。この状況は，良心的構成員の場合，前節でみた受益参加者と比較して派生しやすい。マッカーシーとゾールド (MaCarthy and Zald 1977) は，労働組合に関与する知識人，女性解放運動に参加する男性，公民権運動に参加する白人を念頭に，良心的構成員は，しばしば広範な興味・関心を持ち合わせるので「移り気」であると指摘する。また，そのような良心的構成員は，時間的資源・財政的資源・人的ネットワーク資源などが豊富であるために，1つの運動体のみならず，同時に複数の運動体に関与する場合がある。彼らは，運動体の示す価値に関心を示すよりも，積極的に多くの運動組織的活動に関与する状況自体に満足する傾向がある。したがって「そうした人びとは優先する関心を変えたところで，個人的な忠誠心に反したことにはあまりならない」(MaCarthy and Zald 1977＝1989: 47) のである。また受益参加者として運動参加する人びとは，そのような良心的構成員のコミットメントに不信感を持つ傾向があるという。このケースは，組織的活動に収斂し，運動体の示す価値の内実に無関心な状況といえる。

⑥⇔⑦が起こる可能性があるのは，「旧来の公民権運動」と「ポスト公民権運動」とも，前節②⇔③の説明でみた，以下と同様の状況が生まれた時である。まず，参加対象となる運動体の選択肢欠如が起こる。その場合，良心的構成員自身は，そもそも日常的被差別経験を持たず，その苦しみの緩和するために運動体に自らの居場所を見出す必要はない。そのため可能性としてあるのは，身近な親しい人に依頼されたなどの理由で，運動体の示す価値に共鳴しきれないにもかかわらず運動参加するという場合である。そのような理由による参加であれば⑥⇔⑦も想定し得る。

次に⑤⇔⑧をみる。この状況は運動体の示す価値に収斂し，その組織的活動への分離を示す場合で，前節との関係では①⇔④にあたる。まず，「旧来の公民権運動」の場合からみる。石川 (1990) は，「障害

者」の自立生活運動を例に次のように指摘する。自立生活運動に介助者として参加する人びと（良心的構成員）は，運動体活動の諸場面で，障害を持つ者自身（受益参加者）の希望を確認せず，彼らの代弁を無自覚に行ってしまう。また介助活動のなかで，言葉使いをめぐる無理解により，お互いの関係に摩擦が生じる――例えば，通行人に車椅子を運ぶ手伝いを依頼する際に，介助者が車椅子を「これ」と呼んでしまう――。同じことは，社会運動研究に位置づかないが岡原 (1995) の指摘からも読み取れる。石川や岡原は，「障害者」と介助者の間に存在する「介助活動の中で味わう双方の不満や消耗感」（岡原 1995: 134）を指摘する。同じことは，「障害」をめぐる社会運動のみならず，他のイシューをめぐる社会運動にも存在しうる。また「ポスト公民権運動」の場合も，受益構成員と良心的構成員間におけるコンフリクトは，多様な組織的活動場面をめぐり想定できる。

これを①⇔④と比較すると，ハントらが指摘する「バーンアウト・ストーリー」と共通する。ただし①⇔④では，受益参加者間で起こった相互行為であるのに対して，ここでは受益参加者と良心的構成員の間で起こり，運動体組織的活動をめぐる共鳴しきれなさが，被支援者へ向けられる場合もある。

最後に⑥⇔⑧であり，運動体の組織的活動をめぐり収斂と分離の両方が派生する場合で，前節の②⇔④と対応する。これは，⑧の組織的活動を契機とする共鳴しきれなさの表出であるため，今みた⑤⇔⑧とある程度共通したかたちで表れる。また「旧来の公民権運動」・「ポスト公民権運動」の両者に表出しうる。したがって，前節でみた②⇔④とも共通した「バーンアウト・ストーリー」がみられる可能性がある。その共鳴しきれなさが，受益参加者である被支援者に向けられる可能性がある点は⑤⇔⑧と同様である。

4. アンビバレンスという視座の可能性

社会運動研究のミクロ動員論の焦点は，動員過程の２つの局面に特化した焦点化がなされてきた。その１つは，潜在的/顕在的運動参加者が運動参加する局面への偏重である。それは，社会運動体の示す価値や運動体の組織的活動に参加者が共鳴し，運動体が興隆するという場面である。その背景には，社会運動研究が，なぜ運動体が発生・興隆するのかを伝統的に問い続けてきたためである。

また，もう１つ特化した焦点化がなされてきた局面は，運動体からの参加者の退出場面である（本稿の取り上げてきた分離場面とは異なる）。それは，運動体諸側面に対する参加者による共鳴が完全に失われ運動体から完全に離脱・退出し，運動体が衰退するという場面である。それは主に，運動体から既に退出し不参加に至った元運動参加者の声を取り上げることを通じ分析されてきた。

両局面への分析の問題関心を合わせると，社会運動研究の視座は，社会運動体への共鳴場面ならば共鳴場面，社会運動体からの退出場面ならば退出場面，この２つの局面に特化した焦点化がなされてきたといえる。そこでは，運動参加から運動退出へと移行するかたちで，潜在的/顕在的運動参加者がたどる動員過程が直線的・単線的なものとして想定されている。それは，運動参加者の実際の動員経路がそのような道をたどるか否かに関係なく，社会運動研究が伝統的に保持する分析射程のために，そのような局面の切り取られ方がなされてきたといえる。

しかし，そもそも，運動参加者の動員経路という視点に立つとき，突然に社会運動への関心が生まれ運動参加に至り，また突然にその関心が完全に失われ運動離脱に至るという状況，そのような直線的・単線的な動員経路が高い可能性で生じるとは考え難い。長期的視点に立った上で，仮に，そのような直線的経路をたどるのであっても，その経路の一場面において，運動参加者は，運動体活動の諸側面をめ

ぐり，ある側面には共鳴しつつ（収斂）も他の側面には共鳴しきれなさを持つ（分離），それが共時的に派生する両価性・錯綜性を経験する可能性は十分に考えられる。また，運動参加者が，運動体に共鳴する面（収斂）と共鳴しきれない面（分離）の双方を混交させ，その狭間にありながらも運動参加し続ける場合も多くあろう。

その意味で，運動参加者の意味構築には，運動体の示す価値や運動体の組織的活動をめぐり収斂と分離が共時的に存在し，その複雑なからまり合いが見出し得る。本稿冒頭で紹介したグールドがアンビバレンスに着眼するのも，そのためである。社会運動のミクロ動員論は，このような複雑な意味構築に焦点化することにより，社会運動の相互行為のいかなる面を描写可能になるのか。アンビバレンスという着眼点への重要性も，その点に存在するといえる[5]。

注

1) 本稿が行うのは，社会運動諸場面をめぐる参加者の意味構築という"ソフト"な側面に注目し運動参加を説明する 1980 年代後半以降のミクロ動員論のレビューである。そのため，社会運動研究全体，ならびにそのミクロ動員論に関する包括的命題提示は別稿を期したい。

2) フレーミング研究と共通するアプローチの発展は，日本における「現実構成パラダイム」（那須 1990）の議論にも見出せる。

3) 社会運動研究では，潜在的/顕在的参加者の動員を主に 2 段階に区分する。クランダーマンス (Klandermans 1997) によると，1 つは「合意の動員」で，運動体が人びとの関心をとりつける段階である。もう 1 つは「行為の動員」で，人びとの関心のみならず運動体の組織活動へ導く過程である。要するに，単なる関心表明（前者）と実質的運動参加（後者）の違いである。社会運動体内の相互行為に照準する本稿において議論の対象となるのは「行為の動員」を経た層である。

4) その他に②⇔④表出が予想される状況を挙げると，以下が存在する。例えばケリーとブレインリンガー (Kelly and Breinlinger 1996) は，労働組合を事例に，古参組合員から新参組合員へ向けられる抑圧的態度の存在を指摘する。この抑圧的態度の先には，古参組合員と同様の運動体関与を希求するにもかかわらず，それが叶わない状況をめぐる新参組合員からのアンビバレンス表出が予想される。

また社会運動には，運動外オーディエンス向けの運動イメージを肯定的に保つイメージ戦略が存在する (Benford 2002)。そして運動内のさまざまな「検閲」(ibid.: 68) を通じ，運動イメージや運動目標の重要性を台無しにする参加者の行為が禁止される。なかには，独自の判断で運動体にとって良かれと思って行動したが，それが運動内ルールに抵触し，他成員から罰則的「冷遇」(ibid.: 67) が向けられる場合もある。そこにも組織的活動をめぐるアンビバレンス表出が予想される。

5) 本稿は，アンビバレンス表出をめぐる概括的分析枠組みの整理を行ってきた。その背景には，筆者が進める不登校現象をめぐる社会運動の研究がある。そのため，今後の研究へ向けた分析枠組み獲得も本稿の目的に含まれる。

参考文献

安立清史 1987「運動と社会」『ソシオロゴス』第 11 巻: 1-13.

安立清史 1990「環境問題と社会運動社会学の課題」社会運動研究会編『社会運動論の統合をめざして』成文堂，95-120.

Benford, R. D. 1993 "'You Could Be the Hundredth Monkey': Collective Action Frames and Vocabularies of Motive within the Nuclear Disarmament Movement," *Sociological Quarterly*, Vol. 34: 195-216.

Benford, R. D. 2002 "Controlling Narratives and Narratives as Control within Social Movements," J. E. Davis (eds.), *Stories of change: narrative and social movements*, State University of New York Press, 53-75.

Benford R. D & S. A. Hunt 1992 "Dramaturgy and Social Movements: The Social Construction and Communication of Power," *Sociological Inquiry*, Vol. 62: 36-55.

Collins, R. 2001 "Social Movements and the Focus of Emotional Attention," Goodwin, J., J. M. Jasper & F.

Polletta (eds.), *Passionate politics : emotions and social movements,* University of Chicago Press, 27-44.

Gould, D. 2001 "Rock the Boat, Don't Rock the Boat, Baby: Ambivalence and the Emergent of Militant AIDS Activism," Goodwin, J., J. M. Jasper & F. Polletta (eds.), *Passionate politics: emotions and social movements,* University of Chicago Press, 135-157.

樋口直人 1999「社会運動のミクロ分析」ソシオロジ編集委員会編『ソシオロジ』第44巻第1号，社会学研究会：71-86.

本郷正武 2003「フレーミング・アナリシスによる『良心的支持者』概念の再構成——社会的マイノリティをめぐる社会運動の経験的研究に向けて」東北社会学研究会編『社会学研究』第74号，東北社会学研究会：59-82.

Hunt, S. A. & R. D. Benford 1994 "Identity Talk in the Peace and Justice Movement,," *Journal of Contemporary Ethnography,* Vol. 22 No. 4: 489-517.

Hunt, S. A., R. D. Benford & D. A. Snow, 1995 "Identity Fields: Framing Processes and the Social Construction of Movement Identities," Larana, E., H. Johnston & J. R. Gusfield (eds.), *New social movements: from ideology to identity,* Temple University Press, 185-207.

石川准 1988「社会運動の戦略的ディレンマ——制度変革と自己変革の狭間で——」日本社会学会編『社会学評論』第39巻第2号，有斐閣出版社：153—167.

石川准 1990「自助グループ運動から他者を巻き込む運動へ——ある障害者グループの活動から——」社会運動研究会編『社会運動論の統合をめざして』成文堂，281-312.

伊藤奈緒 2006「社会運動の参加/不参加をめぐる意味構築」日本社会学会編『社会学評論』第56巻第4号，有斐閣出版社：797-814.

Jasper, M. J. 1997 *The art of moral protest: culture, biography, and creativity in social movements,* University of Chicago Press.

Kelly, C. & S. Breinlinger 1996 *The social psychology of Collective Action: Identity, Injustice, and Gender,* London: Taylor and Francis.

Klandermans, B. 1997 *The social psychology of protest,* Blackwell.

MaCarthy, J. D. and M. N. Zald 1977 Resource Mobilization and Social Movements: A Partial Theory, *American Journal of Sociology,* 82(6), pp. 1212-1241. (＝片桐新自訳 1989「社会運動の合理的理論」塩原勉編『資源動員と組織戦略—運動論の新パラダイム』新曜社：21-58.

那須壽 1990「社会運動組織の新たな概念化をめざして——『現実構成パラダイム』構築の試み——」社会運動研究会編『社会運動論の統合をめざして』成文堂，149-176.

岡原正幸 1995「コンフリクトへの自由——介助関係の模索」安積純子他『生の技法　家と施設を出て暮らす障害者の社会学』藤原書店：121-146.

Snow, D. A., E. B. Rockford, Jr., S. K. Worden & R. D. Benford 1986 "Frame Alignment Processes, Micromobilization, and Movement Participation," *American Sociological Review,* Vol. 51: 464-481.

高橋準 1994「『自分を・語る・ことば』——〈個〉に根ざす運動の姿」一橋大学一橋学会編集『一橋論叢』第112巻第2号，日本評論社：134-148.